

令和4年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【めざす学校像】 児童生徒・教職員の学び合いと「つながる笑顔」、「個を活かし合える多様性社会」に向けて期待と夢を育む「港」となる学校

1 医療的ケアを含めた安全安心な校内体制構築 2 質の高い授業実践 3 互いの強みが発揮できる教職員 4 社会と繋がる力の醸成

2 中期的目標

1 安全安心を守る力の向上 ～ 児童生徒の心身の健康と人権を守り、安全・安心に学べる学校 ～

- (1) 学校生活のあらゆる場面で人権が尊重されるよう各人のオーナーシップ・メンバーシップ・スチュワードシップの感覚を研ぎ澄ませていく。
- (2) 高度な医療的ケアを含めて卒後を見通し、スピード感を持ちつつ、個別性に依りてスムーズに実施できる体制構築と環境整備を行う。
- (3) 事故・事案の未然防止に努めるとともに感染予防、食物アレルギー、大規模変災、情報セキュリティへの対応力向上を図る。

2 授業実践力の向上 ～ 児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた質の高い授業実践ができる学校 ～

- (1) 児童生徒が達成感、自己有用感を育みながらより良く生きるための学びの在り方を常に自問し、授業改善に向けた研究・研修を充実するとともに、切磋琢磨の姿勢を向上していく。
- (2) 自立活動における専門性を徹底して向上するための学びのシステムを構築する。
- (3) 学ぶ筋道、内容が見渡せるシラバス、自立に向かう姿がわかりやすいルーブリック評価表、観点別評価、より深い学びにつながる交野マトリクスの活用を進める。
- (4) 電子黒板・タブレットや視線入力装置等の ICT 機器やアプリ、支援機器、リモートシステムの積極的活用を推進していく。
- (5) 訪問教育の充実に向け、遠隔授業やスクーリングを一層充実していく。

3 協働する力の向上 ～ 教職員が学び合い、情報共有の上で多彩かつ柔軟な組織運営ができる学校 ～

- (1) 充実した OJT による次世代育成や継承スタイルをデザインし、信頼感と緊張感を持ちながら学び合うことを職場風土として醸成する。
- (2) 各部署で蓄積されたデータの整理、整備を必須とし、合理的な業務引継ぎシステムを作るとともに、創意工夫や柔軟な対応をしていく。
- (3) 教職員が心身ともに健康で、その使命感と誇り、やりがいを持ちながら児童生徒に向き合い、互いが持てる力を最大限発揮できるようパートナーシップに溢れた働きやすい職場環境づくりをしていく。

4 社会と繋がる力の向上 ～ 児童生徒・教職員が自分らしさを発揮(キャリア発達)しつつ、使命感を醸成する学校 ～

- (1) 「居住地校交流」「地域学校間交流」「支援学校間交流」等の充実を図り、「ともに学び、ともに育つ」教育のさらなる推進を行う。
- (2) 「地域に開かれた学校作り」実現のため、保護者・地域住民・関係機関との協働を進めながら、地域の支援教育力向上の使命を最大限に果たしていく。
- (3) 児童生徒・教職員が、その学びや想い、体験、実践を校内外に積極的に発信していく。

※すべての取組を通じ「仕事のコントロール度、やりがい、達成感」「サポート体制」「量的、質的負担感」等の相関数値である職場の総合健康リスクを、府内職場平均値(102)の近似値を維持する。[R1(109)、R2(106)、R3(101)]

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和4年11月実施分]	学校運営協議会からの意見 水色：肯定的意見 ・ 黄色：参考となる意見
<p>アンケート回収率は、児童生徒 16 名(13%)、保護者(64%)、教職員(100%)であった。保護者分はデジタル化2年め、複数回メール等でお知らせしたが回答率は伸びず、昨年度に比べ 16%低下。肯定的高回答率は全体的に維持しているが、次年度改善にむけての着目分析した重点を以下に示す。</p> <p>【児童生徒アンケート】 昨年度小学部1名、中学部3名高等部3人を対象。協議会委員の意見を受け、今年度は児童生徒の対象の拡大に努めた。質問の1部でも答えられる子どもたちに対象を上げ、教員が対面で質問し、回答する方法をとったところ、小6人、中2人、高8人が対象となった。「わからない」との回答が設問全体で23%あった。やはり本校の児童生徒の実態から、本診断で学校の評価意見を集める難しさを感じた。ただ「社会のルールや命の大切さや進学・卒業時のことを先生は教えてください」という質問に対する肯定率は高等部全員が「はい」と回答した。今年度は卒業生を招いての講演会等が診断時期より前に実施できた成果と分析している。次年度は、子どもたちが真意を回答しやすいよう教員が介在しない方法で実施したい。</p> <p>【保護者と教員のアンケート結果分析方法】 過去8年間の項目ごとの推移を分析。肯定率平均が 80%以下の項目や今年度「わからない」回答率が高い項目に着目して分析を行った。 ⇒(保護者)13項目は上回り、8項目が80%以下 ⇒(教職員)12項目は上回り、教育活動に関する5項目が80%以下</p> <p>【次年度改善すべき課題について】 1. 更なるキャリア教育への理解推進、実践 保:「自分自身や周りの人を大切に、社会のルールを守る態度を育てる」 教:「一人ひとりの興味関心・適性に依りてキャリア教育」が両方 80%超えるも、「わからない」との保回答 14%以上、「あまりあてはまらない」教 14%。 【8年間の推移からみても、今後も検討すべき課題について】 2. 確実な移行支援(進学・各学部連携引継ぎ)・関係機関との連携充実 保:「わからない」18%平均肯定率 68%/「わからない」13% 平均肯定率 67% 3. 本来業務時間の確保・働き方改革の更なる推進 教:「話し合いや教材づくりの時間がある」65%、「適正な校務分担」55%</p>	<p>第1回7月14日(木) 1)校内見学 ・教職員の情報共有、災害時の即時の対応など、緊急体制についての確認を受ける。 2)経営計画 具体的取組みについて ・HP 掲載「学校経営計画ダイジェスト版」は非常にわかりやすい。引き続き充実を。 ・安全安心の人権尊重の取り組みとして「不祥事標語の職員室掲示」の紹介。 ・学校間交流は、コロナ禍でも引き続き対面以外の工夫をし、是非実施してほしい。 3)昨年度の学校教育自己診断をうけて ・教職員回答「児童生徒への対応や教材づくりについて、話ができる時間がある。」肯定感低いことへの分析や対策についてご質問。 ・児童生徒用の自己診断について7人のみであったことへのご質問とご意見 ・保護者からの回収率 80%(教職員 100%に比して低い)その要因についてご質問。 4)その他ご意見 ・通学バスや校内でコロナ感染拡大なしは、素晴らしい。 ・看護師配置が毎日9名体制により多くの医療的ケア児の命が守られていると実感。</p> <p>第2回12月14日(水) 1)実践報告:「本校の防災の取り組みについて」ご意見:感染予防対策視点の準備も必要。 2)経営計画 重点進捗状況報告 3)学校教育自己診断集計結果と今後の分析手法と協議する重点項目について報告 ・「学校は社会のルールを守る態度」とは、重度の障がいの親にとっては、学校がどのようなことをしているのか具体的にわかりにくい。また、「進級・進学に関して個別の引継ぎ」具体的にどのようにしてくださっているのかわからない。 ・保護者の「わからない」回答率が高い項目について「個別的教育支援計画」を作成しているはず。しっかり保護者と連携して支援の継続性を担保していくべき。</p> <p>第3回2月9日(木) 1)実践報告:「本校の自立活動について」自立活動の領域・個別の指導計画・時間の指導の様子を紹介し、交野支援マトリクスとの関連性についてもご説明した。特に質問は、なし。 2)R4年度学校教育自己診断結果の考察について 3)R4年度学校経営計画 評価(案)について 4)R5年度学校経営計画(案)について 中期的目標について承認を得た。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R3年度値]	自己評価
1 安全安心を守る力の向上	(1) 人権尊重の教育推進	ア 不祥事防止標語の職員室掲示と人権意識セルフチェックシートの毎月実施を継続。アンケート、標語のブラッシュアップを図る。評価の低い項目を学年会でチェックし、互いに指摘し合える集団とする。	ア 学年会チェック内容を毎学期ごとに、職員会議にて見える化する。標語・シートの更新	ア セルフチェックシート毎月実施。職員会議で共有。5～1月までの集計結果で「休憩時間を守って(ゆとりをもって)仕事できているか」が毎月低評価。本来の目的と別課題ととらえ、個人アンケート実施。2月学年会では、人権意識の視点で協議予定。シート回答率は毎月低下傾向検討必要あり。 ・不祥事防止:毎学期標語掲示更新、グループワーク研修実施。事例ごとに防止標語を検討、共有、更新済み。(○)
	(2) 心身の健康を守る教育の推進	ア 医療的ケア認定書手続き変更に伴い、教員による実施に時間がかかる場合にも看護師の機動的活動で迅速かつスムーズにケアの実施できる体制整備 イ 感染症防止対策徹底と状況変化への対応、食物アレルギーを含め、個別の緊急時対応表(担任対応、保健スタッフ対応、病院対応の3段階で明記)を不調の事前察知対応にも活用できるよう更新	ア 年間を通じて医療的ケアが滞ることなく実施でき、児童生徒、保護者負担の軽減が図れる。 イ 緊急時対応のスムーズな実施、保健室、担任が協働し対応表ブラッシュアップができる。	ア 始業式から看護師がフル稼働し、吸引と吸入を実施。新入生の注入実地研修を教員が早期に完了するよう体制を組むことで新入生の保護者付き添いも前年度より1日程度軽減された。(○) イ 発災時を想定し、予備薬持参者用の服薬対応様式と授業時間外の注入対応様式を新たに作成、必要な児童生徒について対応表に綴じ更新済み。(○)
	(3) 危機管理体制の強化	ア 備蓄食の計画的見直し更新、防災備品室運用の周知徹底と体育館を避難会場とする運営訓練を実施する。また、避難経路の安全対策、複数化を検討 イ 各教室で個人用避難袋の更新とホームページ上に設置した災害時予備通信フォームを全保護者対象に周知と運用の試行ができる。	ア 3日間分の整備と体育館避難所設営、各学部複数避難経路確認 イ 個人避難袋の更新と入力フォーム全保護者通知と試行ができる。	ア 備蓄食:栄養教諭も参画しながら賞味期限が近付いた缶詰パンを給食で消費等、計画的な食糧更新を整備。避難所設営訓練 12月26日実施、訓練で経路確認済み(○) イ 医ケア児個人用避難袋に注入に必要な物品を追加。4月メール、5月HP上のフォームより全員返信訓練済み(○) 【課題】電源喪失に備えた医ケア児を守る備蓄品の充実。 ア小⇒高2、中9、高⇒小5人全校で16人実施(○) イ ループブック評価表 5月に概要説明 研究授業者、小学部教員半数で日々の授業作成共有 ・交野マトリクスについて 任意研修開催 ・3観点別授業記録様式作成、活用 高等部で実践 高「個指計」様式更新・シラバス作成研修実施 →着実に進んでいる。引き続き、充実が必要。(○) ウ 20 グループ内で1本研究授業実施、20/20の実施済み。確実に全員が授業見学協議に最低1本は参加でき、学部を超えた意見交流、率直な意見交換ができた。2月職員にて研究授業・協議会として実践報告予定。(◎)
2 授業実践力の向上	(1) 質の高い授業実践	ア 学部間1日出張制度と職員室フリースペースの活用(Salon de Katanoite)で相互意見交換促進 イ 授業改善に向けたループブック評価表や交野マトリクスの活用と、日々の児童生徒の学習の様子を3観点別に記録するなどの工夫を加え、個別の指導計画の充実を図る。 ウ これまでの授業見学週間を改め、教員間で4～5名のグループを編成し、授業者と支援者に役割分担の上、授業見学、協議を行う授業者支援会議システムなどの新たな授業研究体制を模索する。	ア 他学部で1日出張の研修者が各学部3名以上[全校で5人] イ 各人がループブック評価表を作成し、個別の指導計画の評価が、全体を通じて、より明確に観点別の記述となる。 ウ 校内研究体制が進み、モデルケースの実践報告会が開催される。	ア 身体(教員 A)月に1度は全クラス巡回。ICT(教員 B)は、週に1回程度巡回、62件、摂食指導(教員 C)を中心に24件の相談を受ける。(12月末時点) この他、専門性を生かした任意研修を各人が実施。(○) イ 新様式の「自立活動の個別の指導計画」様式導入2年めとなり、大きな混乱はない。この導入による実践変化の発表として、視線入力装置の活用で実態を整理し、校内で報告。(○) 【今後の課題】福祉医療人材の指導助言の共有化。姿勢・呼吸についての研修ニーズが高い。専門家による実技講習等計画必要。肢体不自由校の統一した自立活動の「学習到達度チェックリスト」等による共有・導入の検討をしたい。 ア 夏季に関連研修を実施。自己診断教員[87%]。訪問籍参観や長期欠席生徒との遠隔授業や生徒会活動参加等が進み、個別の取り組みにタブレット端末を活用する機会が伸びた。さらに全教員が扱えることを取り組みたい。(○)
	(2) 自立活動の充実	ア 摂食指導、運動姿勢・動作改善に加え、車いす簡易電動化ユニット、上肢機能補助装置、視線入力装置、重力軽減装置、プログラミング教材等の支援機器に関する知見を指導支援に活用できる取組みを進める。 イ 自立活動学習指導要領に示される6区分に即し昨年度改定した個別の指導計画の児童生徒の実態、目標設定、実践、評価による実践、効果をまとめる。	ア 専門性を有する教員による巡回指導が継続的に行われ、昨年実績同程度の対応[摂食・28件 動作改善・連日支援 ICT・82件] イ 自立活動6領域の実態を記入する個別の指導計画による実践変化の研究報告ができる。	ア 夏季に関連研修を実施。自己診断教員[87%]。訪問籍参観や長期欠席生徒との遠隔授業や生徒会活動参加等が進み、個別の取り組みにタブレット端末を活用する機会が伸びた。さらに全教員が扱えることを取り組みたい。(○)
	(3) ICT 機器活用とオンライン教育の充実	ア 電子黒板、タブレット活用と訪問教育を含めた遠隔授業等多様な学びの方法を探り、充実を図っていく。	ア 全教員がタブレットを使用し、教員自己診断で「効果的に活用できている」が60%	ア 夏季に関連研修を実施。自己診断教員[87%]。訪問籍参観や長期欠席生徒との遠隔授業や生徒会活動参加等が進み、個別の取り組みにタブレット端末を活用する機会が伸びた。さらに全教員が扱えることを取り組みたい。(○)
3 協働する力の向上	(1) 教職員の組織的専門性向上	ア 各人のパートナーシップの発揮に加え、初任者に対してチューター(2～4年め)とメンター(部主事等)制を導入し、学び直しや各々の成長を確認し合い、OJTの充実を図る。 イ 個別の支援計画とも関連付けながら交野マトリクス、Mapping Sheet(交野支援版専門性チェックシート)の活用方法工夫と、専門性がどう身についているかの検証方法を検討	ア 各学部の定例会に加え、学期に1度は全学部情報交換会を実施。ストレスチェック同僚サポート向上[8.6ポイント] イ マトリクスやシートの活用方法、効果測定のアプローチについてワーキング等でも論議を進めることができる。	ア 学部ごとに定例会議後等活用して実施。初任者と同学年・同性の教員をチューターに指名する等の工夫で相談体制は充実するも、ストレスチェック「同僚サポート[8.3ポイント]」。(△) 【今後の課題】肢体校初着任者、産育休明け教員等と一緒に学び続け、専門性の向上を図る仕掛けが必要。 イ 自己診断:保「社会のルールを守る等のキャリア教育」わからない回答依然高い。教員も理解の深化と実践の発信が引き続き必要。交野マトリクス活用方法は検討中。「専門性チェックシート」全教員で実施、活用方法や効果測定についてグループワークで論議出来た。(○)
	(2) 教職員働き方改革推進	ア 教職員が心身ともに健康な状態で児童生徒に向き合ために (i)「19時完全退勤」(ii)会議出席者の精選による複数会議同日開催及び研修精選 (iii)蓄積データや業務反省から行事と業務手順を見直し、作業・会議時間短縮 (iv)断捨離、整理整頓により、資料等を探す無駄な時間を短縮	ア 複数会議の同日開催増加とノー会議設定と19時退勤の維持	ア 授業期間、毎月2日程をノー会議日設定、履行できたのは10日。(小グループによる打ち合わせ除く)複数会議を同日開催は、会議参加メンバーが重なっている限り難しい。(△) 【今後の課題】19時完全退勤から17時全教職員完全退勤をめざす。定時休憩時間45分の確保。
4 社会と繋がる力の向上	(1) 交流及び共同学習の充実	ア 学校間交流(支援学校間でも計画を進める)、居住他校交流については、直接交流が難しい場合 DVD や web 会議システムなども活用をしながら、相互理解が深まるように取組み、積極的にHP上で発信していく。	ア DVD等も活用しながら交流機会を増やし、実践と結果を学期に1度以上公開	ア 学校間交流、小1校、中1校、高1校コロナ禍でも工夫実施。居住他校小10校中4校。前年度より大幅に増加実施できた。学期に1度以上HPの公開は出来なかった(△)
	(2) 地域に開かれた学校作り	ア 地域の住民の方々やスクールサポートスタッフ、委託の通学バス職員、給食調理員、技能員などとの交流を企画し、お互いが活性化できる取組みをする。 イ 地域校舎へのリーディングスタッフによる支援終了後の本校版アンケートを実施し、より効果的なフィードバックに繋げていく。また、交流校である近隣高等学校と支援教育関連校内研修での教員間連携を図る。	ア 地域向け学校便りの発行と交流や連携授業を各学部1回以上実施 イ アンケートの結果を即時的に反映できるよう運用する。近隣高等学校への呼びかけと校内研修実施	ア 全学部で実施。特に、地域住民との世代間交流は、お互いの縁を復活させるものとなった。どれも素晴らしい取り組み。HP等で発信する学校便りも充実。(◎) イ 府による新アンケート実施となり、本校版は実施せず。訪問相談後の「1か月票」の提出が支援依頼校から返信が遅く、次の支援に活かすにたい状況があった。(△)KSC主催の夏季連続講座を近隣の高校へ案内。0人。本校夏季校内研修に福祉事業所案内。13事業所参加。(○)
	(3) キャリア教育の充実	ア スポーツ大会はじめ、キャリア教育の一環としての学部間きょうだい学級を軸とした取組みを推進する。また、保護者向け進路情報のさらなる発信と卒業学年が中学部、高等部の体験授業複数回実施 イ 校内での讃歌展や作品展示スペース活用、児童生徒会活動(児童生徒会役員選挙運動や公約を果たす活動含む)、図書活動(読み聞かせや読書ランキング)、放送活動などを含めた表現活動を活性化させる。	ア きょうだい学級の取組み実施。進路便りの発行と小・中学部卒業学年の中・高等部体験授業を年2回以上実施 イ 対外発表を含めて、児童生徒自身が発信、発表する機会が昨年度より増える。	ア スポーツ大会きょうだい学級で対戦。年齢を超えたチームメイト間、部を超えた教員の交流連携を強められた。進路便り発行2回、体験授業小⇒中(2回)、中⇒高(2回)実施。(○) イ 展示掲示板を整備。児童生徒作品校内展示が活発化(各学部美術工作等、療育園・各市進路情報等) ・図書活動・生徒会役員による公約活動活発化。 ・オーサービジット事業、芸術専門家招聘の国事業活用(絵本作家・欄間工芸・沖縄舞踏・和太鼓他) ・オリンピックポッチャ選手との交流・ジャパンパラ陸上競技大会フレームランニングオープン競技出場 ・子どもたちの賛歌展他、個人および団体での発表の場が大いに増えた。コンサート各種展覧会応募入選。(◎)